

水 稲

6月の栽培管理

◆早期・早植栽培

6月に入ると生育が進み茎数も増加します。中旬には最高分けつ（茎が最も多くなる）期になりますが、茎数が20本に近くになれば中干を行います。雨が少ない場合は順調に進みますが、梅雨が活発になれば排水が不十分になるので注意が必要です。中干の間に葉色がさめてくれば穂肥が施せる稲になります。

○中干は、天候にもよりますが7日～10日程度で大きなひび割れにならない程度で歩けることが望ましいです。

○穂肥は幼穂が出来始めてから施します。田植えの時期と気象経過で毎年数日前後しますので、その時期（7月上旬）になれば幼穂（穂の素）を確認して施します。基肥1発タイプの場合は穂肥を施しません。

○水管理 幼穂形成後は穂の素が生長して穂孕み・出穂と急速に成長しますので、水が切れないう管理に注意します。

◆普通植・晩植栽培

○本田準備 苗の生育に合わせて畦草刈り・耕耘・代掻きを進めます。代掻きの翌日頃に植えられることが望ましいです。田植え準備

に当たり肥の量は稲作ごよみと近年の稲の生育状況・田の条件を勘案して決めてください。こだわり米として出荷される場合には、こだわり米栽培ごよみの基準に沿って、特別栽培米にあつては特別栽培米ごよみと契約内容に従って栽培してください。

○防除 田植時には病虫害防除剤（平坦部ではイネミズゾウムシ予防にオンコル粒剤5を、山沿い・谷間ではいもち病を含めブーンパディート箱粒剤などを）苗箱散布又は田植同時処理で植付けます。

○除草 肥料・農薬予約申込書のJA京都やましろ水稲雑草防除体系に記載の除草体系と決まり事に基づいた除草に努めてください。なお、代掻き・均平が不備な場合や畦管理・水田基盤に損傷がある場合には除草効果が発揮できない場合があります。その場合は残存草種に対応した後期除草が必要ですが、中干し期が除草剤の使用限界となりますので早期応が必要です。紋枯病が毎年発生する田では基肥の窒素分量は4kg/10a以下とします。また、植付株間を2cm程度広くし過剰な分けつ（茎数の増加）を抑制します。

野 菜

梅雨期の野菜の管理と防除

◆一般管理

梅雨期になりますが近年は晴れ間と大雨が極端になる傾向があり、露地・施設とも畝の水分変動を少なくし、作物の生育に必要な水分を補充できることが重要です。大雨時の排水対策と晴天時の灌水対策、高温対策が重要です。特に、転換畑の場合は周囲に畦があるので畝の方向と排水口の数と位置が排水量を

決定します。また、晴天が多い場合には水分の蒸散が早いので土の水分補給と管理に注意が必要です。更に、施設では、大雨時に雨水がハウス内に侵入しないよう周囲の排水溝を整備してください。雨水の侵入は土から伝染する病害の発生の原因となります。

果菜類で秋に向けて収穫を続ける作型の場合は、主枝の切り戻しだけでなく、追肥・整

枝・剪定を必要な管理として継続します。

◆病虫害防除

○**露地野菜** ナス、エビイモではハダニの発生に、更に、ナスではカスミガメ、オタバコガ、テントウムシダマシ、アザミウマに、エビイモではハスモンヨトウ、スズメガの発生に注意が必要です。小松菜ではキスジノミハムシ、コナガ、ヨトウムシ類が多くなります。また、降雨が5日以上続く場合はナスの褐色円星病、疫病、半身萎凋病などが、小松菜ではべと病等に注意が必要です。4・5日毎に雨天と晴天が繰り返す場合は比較的病虫害とも少なくなります。

○**施設野菜** 防虫ネット張りの施設では出入口の管理が適切であれば害虫の発生は極めて少なく、アブラムシ、コナジラミの侵入とハダニ及びうどんこ病に注意し早期発見・初期防除に留意することです。また、防虫ネットを開口部に設置していないハウスでは、害虫の出入りは放任状態になりますので露地と同じと判断してください。雨よけにビニールフィルムを張っている分病気が少なくなる効果は認められます。

○**防除上の注意事項** 露地・施設の害虫ともに下の囲み内に記す病虫害にあっては、年間発生回数が多く農薬耐性や抵抗性が発達しやすいので農薬の輪用に努めてください。

◎○印を付した病虫害は実態があるとされています。防除に際し本情報裏面農薬一覧の左端「作用機構分類コード」の同じ記号の農薬を連続使用しないよう留意してください。また、作物別に農薬一覧を作成し、支店の営農担当から作物別部会等で配布している資料についても「作用機構分類コード」を掲載しています。

【農薬の輪用が特に必要な病虫害】

- | | |
|----------|----------------|
| ○うどんこ病 | 灰色かび病 |
| 葉かび病 | ねぎのさび病 |
| ○アブラムシ類 | ◎コナジラミ類 |
| アザミウマ類 | ○ハダニ類 |
| ○コナガ | アオムシ(モンシロウの幼虫) |
| ハスモンヨトウ | オオタバコガ |
| ハモグリガ類 | ハモグリバエ類 |
| キスジノミハムシ | |

茶 樹

二番茶の生育促進と病虫害防除

◆**二番茶の施肥** 一番茶摘採後に施す肥料は、二番茶の芽出し肥に当たり、生育と品質向上を促す肥料です。そのため一番茶摘採後直ちに施してください。施用量は年間の20%で即効性のある肥料を使用します。茶種により異なりますが栽培ごよみや予約注文書で購入した肥料を遅れないよう施してください。

◆**一番茶後の整枝** 一番茶の摘採を行った後に遅れ芽が発生します。この芽を放置すると、まもなく硬葉となり二番茶の品質低下に繋がるため、一番茶摘採後10日程度経過してから摘採します。遅れると二番芽が伸び始めこれを整枝することになり、生育不足になり減収に及びますので、二番芽が伸び始める前に行います。整枝の深さは一番茶摘採面か、その上、遅れ芽を取り除く様に浅く摘採面を整えてください。乗用型摘採機では一番茶を摘採した高さを茶園毎に記録の残し、同じ高さで整枝を行います。

◆**病虫害防除** 一番茶後には既に発生していた病虫害と二番茶芽に新しく発生してくる病虫害のすべてを防除しますが、種類により発生時期にずれが有りますので対象害虫新芽が出るまでと、生育を始めてからに分けて防除します。

○**クワシロカイガラムシ** 5月下旬～6月始めに発生しますが例年より数日早く防除時期になる見込みです。白い貝殻の見られる周辺に粉状の幼虫が発生したら防除時期です。遅れないよう防除してください。

○**新芽の病虫害** チャノホソガ・ミドリヒメヨコバイ・チャノキイロヒメヨコバイ・炭そ病・もち病は二番茶の新芽に発生し、生育と品質に影響します。チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、炭そ病、もち病の防除は、摘採面更新後20日頃に防除が必要です。防除は防除指針に従い適正使用に努めてください。